戦後70年 生きる伝える

第5回　終戦

1945年8月15日、太平洋戦争の終戦を迎え、ことし、その日から70年の年月を経ました。終戦直後に生まれた人も70歳という年齢を迎え、戦争の記憶も薄れていくばかりです。幼い頃に戦争を体験した成田市平和啓発推進協議会・戦争の語り部の皆さんから当時の生活の様子を聞き取り、今後、二度とあのような悲惨な戦争を繰り返さないため、ここに紹介することとなりました。

1945年8月15日。暑い真夏、それは、前触れもなく訪れた。開け放たれた家々の窓から聞こえてくるラジオの声に大人たちは聴き入っていた。深くうなだれる者、泣き崩れる者もいた。

当時、中郷国民学校6年生だった木川利子さんはそれを日直のために登校していた夏休みの学校で聞いた。「正午に天皇陛下からの大事な放送があります」と校長先生に呼ばれ、校長室で直立不動で聞いていたのを覚えているという。しかし、聞こえてくる言葉が何を意味するのか子どもたちには理解できなかった。ただ、大人たちの様子でただならぬことであることは、子どもたちも感じていた。

このとき流れたラジオ放送がいわゆる玉音放送で、その内容が戦争の終わりを告げるものだったということを理解したのは、しばらくたってからだった。

終戦を迎えたといっても、日々の生活が変わることはなかった。米や味噌、砂糖などの主な食料品をはじめ、生活に必要なものの多くは相も変わらず配給制。大人たちは、子どもたちにひもじい思いをさせまいと、毎日のように食料の調達に走った。権現山(JR成田駅東口前)に建ったバラックのマーケットで着物を売ってつくったお金で米を買い、それでも足りず農家へ直接米を買いに行った。しかし、その農家といえどもほとんどの米を供出しなければならず、自分たちの食べる米を確保するのが精一杯で、なかなか売ってもらうことができなかった。ある時、お寺が火災にあった。すると、お寺の蔵からたくさんの米が運び出された。供出を逃れるため寺の蔵に米を隠し、検査を逃れようとしていたのだ。

木川利子さんが玉音放送を聞いた中郷国民学校(成田の歴史アルバムより)

学校の教室は戦地からの引揚者の宿舎に充てられたため教室が足りず、神社やお寺の境内で授業を行うこともあった。戦意高揚を掲げた教科書の文章は「墨汁で塗りつぶして読めないように」という進駐軍の命令により、子どもたちの手で全て塗りつぶされた。塗りつぶし終わった教科書はほとんど真っ黒であった。

日本は連合国軍の占領下に置かれ、成田にも進駐軍がやってきた。当時、寺台に住んでいた佐藤弘子さんは、ある日、ジープに乗った進駐軍の兵士からチョコレートを差し出された。なんとなく怖く手を出さずにいたが、姉たちにせかされこわごわ受け取った。生まれて初めて口にしたチョコレートの甘い香りと味。「これが外国の味なんだ」と子ども心に感動した。戦時中、口にできる甘いものといえば、水あめや氷砂糖ぐらいのもの。それもめったに手に入らなかった。そんな生活を送っていた子どもたちにとってそのチョコレートはなんともいえないおいしさであったろう。

物資が足りなくなり、戦時中より市民の生活は苦しくなったように感じられた。しかし、そんな中でもそれまで毎日のように鳴っていた空襲警報を聞くことがなくなった。死におびえることもなく、毎日を過ごせることがどんなに幸せなことか。

戦時中は山車や屋台の運行が中止され仮装行列が行われていた祇園祭も終戦の翌年から復活し、同様に中止されていた各地区の祭礼も復活し、街もにぎわいを徐々に取り戻してきた。

少しずつではあるが、確実に復興への道を歩んでいったのである。

編集後記

8月15日号から連載してきた「戦後70年 生きる伝える」も今回が最終回。ご協力いただいた成田市平和啓発推進協議会語り部の皆さんには、時にしんみり、時に明るく体験談をお話いただきました。当時まだ幼い子どもだった方たちには、こんなに発展した今の日本を想像できたでしょうか。今の子どもたちに悲しい思いをさせないためにも、この体験を語り継いでいかなければなりません。

平成27年12月15日号　No.1305

成田市のホームページ
http://www.city.narita.chiba.jp

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。

平成27年12月15日号／月2回　1日・15日発行／編集発行：成田市役所企画政策部広報課　〒286-8585 千葉県成田市花崎町760番地　電話0476-22-1111(大代表)